

## 9. 総括

本事業では、平成 26 年度に引き続いて、北海道及び東北地域において、主に簡易囲いわなを用いた捕獲手法と技術の高度化を目指して各種の取り組みを行った。

北海道地域では平成 26 年度とモデル地区が変更され、苫小牧地域において新たに実証事業を行った。簡易囲いわなを用いて、捕獲したシカをできるだけ傷つけないような仕組みを試行したり、体重計測式の簡易囲いわなを使用したりしたが、残念ながら捕獲効率は低かった。本年度事業を実施した地域は、通常の狩猟が非常に盛んに行われている地域で、シカの警戒心が非常に高かった。自動撮影装置のデータは、わなに衝突防止用の「目隠し」をつけるとシカの出没頻度が下ることを示した。しかし、本事業では、「目隠し」を装着したことで、GPS 首輪を装着するための捕獲に成功した。捕獲された個体は吻の部分若干傷つけたが、基本的な健康な状態を保ったまま捕獲され、無事に GPS 首輪を装着して放獣出来たことから、目隠しを設置することで捕獲したシカをいたずらに傷つけないという目的は達成されていたと考えている。しかしその後、最終的にはわなにシカが進入しなくなり、わな周辺でもシカの痕跡がほとんど見られなくなった。そこで、「目隠し」を取り外すと、再びわなの中にシカが進入するようになった。この事例から、「目隠し」の設置によってシカが警戒したものと推測された。事業開始時の予想では、昼間は狩猟者に警戒して出てこないシカも、夜間には餌に誘引されて出てきて、わなに入るのではないかと考えていた。しかし、警戒心の高いこうした地域では、目隠しをするだけで警戒心を高めてしまって、結果として捕獲が望めなくなるということが示された。当該箇所は北海道の太平洋側で積雪も少なく、ササ等他の餌がある程度採食できるということも、餌による誘引力低下の一因として考えられる。すなわち、餌の魅力よりも警戒心が勝り、他の餌（ササ等）を採食するようになると考えられる。東北地域も太平洋側は積雪が基本的に少ないため、同様の状況が発生して捕獲数が伸びないのではないかと考える。囲いわなは、基本的に餌が少なくなる際に有効である。警戒心が高く、且つ積雪深が浅くて餌資源がそれほど枯渇していない地域においては、目隠しなどを設置せずに捕獲する必要があることが示されたが、その際に捕獲した個体を必要以上に傷つけずにどのように止めさしを行うかという点については、引き続き技術開発を行う必要があると考えられる。

一方、本事業を通じて地域の森林管理署をはじめ、振興局（道）、市町村、猟友会と合同の現地検討会を行って情報を共有したり、有効活用事業者を含めた体制を構築したりと、モデルとなった地域に新たなネットワークを構築することができた。今後、当該地域で捕獲事業を実施する際の基盤として利用できるのではないかと考える。

前述のように、残念ながら、最終的な捕獲数は想定よりも少なく、捕獲効率には改善の余地が見られた。しかし、本事業で使用したわなは、道内の他地域で実際に使用されて実績のあるわなであること、相当な労力をかけてメンテナンスし、誘引作業等行ったにもかかわらず捕獲数が伸びなかったことなどから、結果として、この地域では他の手法が有効であったのではないかと考えた。苫小牧猟友会は、市の有害駆除事業を受託して、足くく

りわなを用いて数百頭のシカを年間で駆除している。こうした警戒心の高い地域では、囲いわなよりも足くくりわなのような手法が適しているのかもしれない。地域の生息頭数や状況による手法の選択フローの例を第 8 章で示した。最も適した手法を適した場所で選択するための指針を示すことも重要であると考えられた。

東北地域では非常に良好な地域との関係を築くことができた。昨年度に引き続き大船渡地域と、新たに釜石地域で事業を展開した。Web カメラを用いて捕獲を合同で行うイベントや、地域の関係者とともにわなを設置したり、誘引を行ったりと、地域ぐるみで本事業を推進することに成功したと考える。本事業をもとにして、簡易囲いわなや ICT 技術を用いたシステムを導入した市町村も存在することから、本事業を実施した意義は大きいと思われる。

一方、北海道と同様に捕獲効率には依然として課題が残った。ただ、本事業で実施した場所のように、希少猛禽類の生息圏や、メガソーラーのような施設近くなどでは、銃器による捕獲よりもわなによる捕獲が適しているため、簡易囲いわなの利用も含めて、銃器以外の手法でどのように効率よく捕獲をしていくかということについて実証を重ねていく必要があるだろう。

本事業で北海道地域と東北地域共通で試行した首用くくりわなについては、両地域ともに容器内においた誘引餌をシカが採食している様子が観察された。北海道においては実際に捕獲にも成功した。一方、東北地域では、試験設置した容器の近くにカモシカが来るなど、錯誤捕獲の可能性についても示唆された。餌によって誘引すること、足くくりわなのように締め付けないことなどから、クマの錯誤捕獲についてはかなり可能性が軽減されると思われる。足くくりわなは、北海道ではヒグマ、東北地域ではツキノワグマの錯誤捕獲の可能性が高く、特に無雪期の使用が懸念される。こうした欠点を首用くくりわなは補う可能性があるため、引き続き事例の収集に努め、今後に向けて活用していきたい。

平成 26 年度事業及び平成 27 年度事業において、北海道地域では合計 5 個体、東北地域では合計 4 個体に GPS 首輪を装着することに成功した。いずれも、これらの地域ではほとんど過去にこうした調査がなされてこなかったため、学術的にも非常に価値の高いデータを得られると期待されるが、それ以外にも、こうした情報が現場で活用されることも望ましいと思われる。すなわち、データを基にして今後の対策事業が展開されたり、現場職員の啓発に利用されたりすることで、今後のシカ対策がより具体的なデータに基づいて推進されるものとなり、本事業の成果がその一助となることを期待する。また、現地検討会では北海道地域でも東北地域でも同じ質問が出されたが、これらの首輪のデータを今後どのように共有していくかということも課題である。本事業で装着した GPS 首輪だけではなく、両地域の他のプロジェクトで装着された首輪のデータも共に閲覧できるようなデータベースが構築されることが望ましい。そうすることで、より広域にシカの動きを把握することができ、戦略的にも戦術的にも、客観データを基にした計画が立案されるものと思われる。

本事業では、最新の技術を試用し、その有用性を実証してきた。各種の技術は日進月歩

で、技術開発には終わりが無い。しかし、シカを捕獲するという点に関していえば、現在までにある程度開発は進んでおり、次はこれをどのように現場レベルで運用していくかという段階に差し掛かりつつあると言える。個々の技術は非常に優れており、さらに進化していくので、適した手法を適した場所と季節に配置して実施すれば、その効果は必ず得られると確信する。そのため、適材適所で手法を選択するためのマニュアル作りなども必要ではないかと考えられた。

過去 2 年度にわたり実施された本事業の結果、日高地方、苫小牧地方、大船渡地方、釜石地方、その他周辺の地域に、新たな体制の基礎は構築できたと考える。また、本事業を通じて試行した様々な技術は、現地検討会や見学会を通じてある程度共有された。こうした体制や技術が、今後、これらの地域で対策が講じられる際の基礎となることを望んでいる。

#### <謝辞>

本事業を推進するにあたり、北海道及び岩手県の担当者の皆様、地域の市町担当者の皆様、北海道及び東北の各地域猟友会の皆様、各種林業事業体の皆様に、各種の許可や地域ネットワークの構築の援助、事業推進へのご理解など、様々な場面でご協力を賜りました。この場にて、御礼申し上げます。